

# 井戸端だより

第30号

発行日: 2000. 9.28

発行: 暮らしの学習会

田んぼのあぜ道には、彼岸花が満開です。稲刈りをすませた田も増えてきました。これから、実りの秋本番ですね。



さて今回は、町政について、ざつくばらんに語り合う会をもったり、合併問題についての学習会に参加したりしました。そして選挙では、暮らしの学習会独自の活動が展開できました。

8月例会報告 \_\_\_\_\_ p2

市町村合併について学習しました。 \_\_\_\_\_ P4

政策論争にもとずいた公正な選挙を望むとともに、住民の判断材料になればということで、町長候補の2名の方に公開質問状を提出し、住民に配布しました。 \_\_\_\_\_ P6

## 会員の投稿

日本人と英語 \_\_\_\_\_ p10

届け、この願い \_\_\_\_\_ p11

この夏を振り返って \_\_\_\_\_ p17

雑感 \_\_\_\_\_ p18

モネの庭を訪ねて \_\_\_\_\_ p19

## 8月例会報告

8月例会は、5日（土）午後8時から林宅で行いました。昼間の例会には参加できない会員への配慮と、男性の参加も望めるのではないかとの期待からでした。結果、この目的は、大いに達成され意義のある例会となりました。以下のテーマについて、ざっくばらんに意見交換・情報交換ができたことは大きかったと思います。

### ・ 市町村合併問題について

重信町も当然この問題は避けて通れない。2005年の期限付きで、国から合併に関する特例が提示されているが、合併のメリット、デメリットを客観的にあげ、その中で、重信町の将来にとって、どのような選択がベターかを考えていきたい。衆議院議員選小選挙区のような、単なる数あわせの合併にはしたくないものだ。特例法の市の最低条件4万人は3万人に最近変更されたとのこと。

ゴミ問題の説明会のように、決まってから説明を受けても意味がない。どのように決定するか判断の材料になるように、住民の意見を吸い上げるための事前の懇談会を何度も開いてもらいたい。

### ・ 重信町のホームページ

のぞいてみたら、ただいま準備中という事で何もなかった。立派な庁舎が出来たのに、これでは、ちょっとお粗末。これからの時代この分野の充実を望みたい。

### ・ 学校給食に町内産の野菜・米を使ってほしいという運動

若いお母さんたちの間でこの運動が起こっていて、署名も集まっている。

### ・ エンゼルプランについて

数年前に持ち上がった愛大付属病院看護婦さんたちからの夜間保育・24時間保育の要望について、今どうなっているのだろうか。

子供を生み育てる人、子供の数を増やすために、行政が多様なサービスを提供するという基本的な視点に立って見た場合、住民の保育ニーズを満たすためにも、例えば町主催による保育士の養成講座の実現ができないだろうか。

### ・ 新住民と旧住民の融和

重信町も新住民が6割を超えたが、旧住民との融和がうまくいっているのだろうか。

拝志、見奈良地区では、子供の少年式の時、地区の青年団が新住民・旧住民の別なく神社と一体となって祝いの行事をしてくれて、感激した

ことがあった。

伝統芸能などの継承を通して、融合がはかれるのではないか。

祭りや獅子舞など宗教色を含む伝統行事は、みんなでやるということは無理なのではないか。

• 町の地区別懇談会について

各地区で、町政にたいする意見を求められても、なかなか出しにくいし、深められない。テーマごとに地区別でやるというのは無理だから、テーマごとに、地区の垣根を超えて懇談会を開いたらどうか。その開催のお知らせは、広報なりインターネットなりを通してしらせればよい。

• 町議会について

傍聴に行きたくても、日程がわからない。事前に広報などで知らせしてほしい。また、議会報告は、もう少し詳しくしてほしい。誰がどのようなことをいったかも広報が紙面上無理なら、インターネットなどを通して知らせしてほしい。

• 町への意見書について

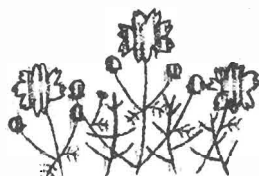
去年だったか町民から町長へ意見を出すという事があった。一部広報でどんな意見が出たか公表されたが、他の意見についてはどうなっているのか、実行されたことがあったのかどうか知りたいものだ。

• 健康ボランティアの活動について

地域ボランティア活動の一つとして大いに評価できる。実際にしてみても、保健婦の仕事がいかに大変で、人数も十分ではないことが判った。健康についての関心も増した。他の分野にも広げていったらいいのではないか。

いろいろな意見が出、情報が交換できたように思います。これを、町にどのように伝えていくか今後の課題だと思います。

(T.H)



# ～いま、なぜ市町村の合併なの？～

## 日常生活圏の広がり

高速道路ができたり、インターネットの発達などによって、あなたのお住まいの市町村の区域を越えて生活するのが普通になっています。

## 地方分権の推進

地方分権が実行の段階となり、自己決定・自己責任の原則の下、住民に身近なサービスの提供は各地域で責任を持つことが求められています。

## 市町村を取り巻く潮流

### 少子・高齢化の進行

急速な高齢化社会への進行に伴って、小規模な市町村では、介護保険等の行政サービスのレベルを維持することが困難になることが予想されます。

### 厳しい財政状況

国・地方を通じた借金残高が主要先進国中で最悪の状況になっており、基礎的な行政サービスの提供に支障がないようにすることが望まれます。



市町村が住民の期待に応えていくためには

- ①住民の生活圏の広がりに対応したまちづくり
  - ②市町村行政サービスのレベルの維持、向上
- の必要性があります。

これらの課題に対応する方策として、

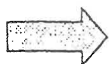
市町村合併が有効な手段のひとつであると考えられています。

しかしながら、市町村合併には、次のようなメリットとデメリットが想定され、

合併に当たっては、メリットを更に活かし、デメリットをできるだけ少なくするよう形で進めていく必要があります。

メリットと言われているもの (例) ⇒⇒⇒	それに対する反論
<ul style="list-style-type: none"> <li>・広域的な観点からのまちづくりが可能となる</li> <li>・保健婦、土木技師等の専門職員が増強できる</li> <li>・管理部門の効率化により行政経費が節約できる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・合併しなくても、広域行政で対応できる</li> <li>・広域連携や職員の資質向上で対応できる</li> <li>・行財政改革で、ある程度の経費を節約できる</li> </ul>
デメリットと言われているもの (例) ⇒⇒⇒	それに対する反論
<ul style="list-style-type: none"> <li>・周辺地域がさびれる</li> <li>・住民の意見が行政に届きにくくなる</li> <li>・地域の連帯感が薄れ、コミュニティが崩壊する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・合併しなければ、地域全体が(周辺地域は更に)さびれる</li> <li>・地域の意見を聴く仕組みの活用で意見が届く</li> <li>・地域社会の振興に配慮した施策で解決できる</li> </ul>

市町村合併は、関係市町村が地域住民の意向を踏まえ、自ら決定していく問題です。



県では、地域における合併論議の資料を提供する趣旨で、市町村の合併のパターン等を含む要綱を策定中です。

# 地方の時代で議論白熱

## 重信の女性塾 合併テーマに講演会



市町村合併について考えよう。温泉郡重信町田窪の町民会館でこのほど、県市町村合併推進要綱策定検討委員会長を務める藤目節夫愛媛大教授が「地方の時代と合併」と題して講演した。

同町の生活文化女性塾(西田孝子塾長、三十二人)が主催。同女性塾メンバーのほか、同町職員や近隣の川内町などから十八人が参加した。

藤目教授は、合併した場合としない場合のメリット、デメリットを示した上で、各自治体が「政策立案自治体」として①首長、

合併のメリット、デメリットについて語る藤目教授(右)の話に耳を傾ける参加者

議長、議員が地域づくりのポリシーを持つこと②施設などの「箱もの」より知恵に金を掛けること③市民の意識改革の必要性を挙げ、それぞれのケースについて説明。「最初に合併ありきではなく、地域の政策立案能力が必要」と訴えた。

講演の後、同教授、参加者がディスカッション。参加者から「議論の起きない中で、住民に知らされないうちに合併が決められるのは避けたい」との声があった。また、「それが議員になっても同じと思うのではなく、自分たちの力で議員を選ぶのだ」という意識を持つべき」と行政に対する積極的な参加を呼び掛けるなど、議論は白熱。予定の時間をオーバーして同日の会が終了した。

同女性塾では今後、塾生だけでなく、一般住民も参加した、行政や女性の社会参画などに関する勉強会を開いていきたいと話している。

くらしの学習会は、主に重信町に住んでいる主婦のグループで、8年前に発足しました。月1度の例会をもち、くらしに関わる様々な問題をその都度私たちに学習してきました。例えば、水問題からは、三ヶ村泉の絵葉書作成へと活動が広がりました。

これからの私達のくらしに関わる問題には、2005年をめどに論議しなければならない市町村合併、今年から施行になった介護保険、見直しが検討されている中予分水、来年4月完全実施予定の容器包装リサイクル法等があります。

重信町では、20世紀最後の今年、21世紀の町政を託す町長・町議同時選挙が行われます。次期4年間の町政を担う町長は、今までにも増して重要な問題を抱える事になると考えます。

そこで私達は、町長候補の方々の考え方及び姿勢を知りたいと思い、質問状を送らせていただきました。

お忙しい中、迅速かつ誠意ある回答をお寄せいただいたことに大変感激し、感謝しております。

お二人の候補の回答が少しでも町民の皆様の選挙に対する関心の向上につながれば、これほど幸いなことはありません。

なお、文面は全て原文のまま掲載させていただきました。

くらしの学習会

愛媛県温泉郡重信町志津川1199-9

くらしの学習会

〒791-0204 電話 089-964-6956

1. 今盛んに市町村合併問題が論議されていますが、あなたは、重信町にとって合併は必要だと考えますか。  
 もし必要だと考える場合、どこと合併するのが重信町にとってよりよい道だと考えますか。それはどうしてですか。  
 もし必要ないと考える場合、どのような生き残り策を考えていますか。

(和田はるき氏)  
 合併問題については、そのメリット、デメリットや重信町における将来にわたっての問題点などを住民の方に情報を公開し、住民・議会・理事者ともに話し合っ  
 て対処して行きたいと考えています。

(渡部きよはる氏)  
 重信町には必要ないと考えます。合併が必要だとすれば、町民投票にて決定させて頂きたいと考えています。

2. 介護保険がスタートして6か月足らずになりますが、重信町では何か問題が起きていますか。  
 何か問題があれば、その解決のため、重信町独自の施策は考えていますか。

(和田氏)  
 介護保険がスタートし、6か月が経過していますが、重信町では特に問題となっ  
 ているということはありません。要介護認定者も約600人となっていますが、1号保  
 険者の保険料の徴収が始まることもあり、今後ケアプランや介護保険の需要動向に注  
 意しながら、的確に対応して行きたいと考えています。さらに要介護にならないため  
 に、自立している高齢者の方へも今までのレベルを落とさないよう、フォローを町が  
 独自に行いたいと考えています。

(渡部氏)  
 現時点において、具体的な問題はないと思  
 います。公約として、旧町舎跡に重信町町営の福祉施設として老人ホーム、知的・身体障  
 害者の作業所等の建設をあげており、介護保険だけでなく、福祉全般に力を入れ、福祉  
 の充実した町づくりを考えています。

<p>3. 重信町の今後の水問題についてどう考えますか。(中予分水事業についてもお答えください。)</p>	
<p>(和田氏)</p> <p>例年並の降水量があれば十分まかなえます。ただし、異常渇水となれば深刻な状況になります。</p> <p>町内の新規水源地を開発し、中予分水も視野に入れて対応していきたいと考えています。</p>	<p>(渡部氏)</p> <p>本来公益で行うものでありますので、本町も全力で協力すべきものと考えます。</p>
<p>4. 燃やさないゴミについて、現在の方法でいいと考えていますか。よくないと考えている場合、どのようにしたらいいと思いますか。</p>	
<p>(和田氏)</p> <p>燃やさないごみについては、すべてがリサイクルされてはおりません。</p> <p>今後もより細分化された資源化を目指し、進んでいくと思いますが、「容器包装リサイクル法」に定められているように、事業者・市町村・消費者がそれぞれの役割を果たしていく社会づくりが求められています。</p> <p>可燃ごみや粗大ごみを含め、埋め立て地の寿命の問題や資源の有効利用の面から皆様のご意見とご協力をいただきながら、循環型社会の建設に向けて努力していきたいと考えています。</p>	<p>(渡部氏)</p> <p>徐々に分別をより細分化していくべきと考えます。</p> <p>上記のようにしてリサイクルできるものは十分に活用するべきと考えます。</p>
<p>5. 情報公開についてどのように考えていますか。情報公開できないものがあるとしたら、それはどういう事柄についてですか。</p>	
<p>(和田氏)</p> <p>来年度より実施予定で、現在準備を進めています。</p>	<p>(渡部氏)</p> <p>情報公開は必ずすべきものであり透明な行政こそが本当の行政です。今回県の情報公開において私方も多数の事がわかりました。</p> <p>プライベートな情報は公開できないと思います。行政については、情報公開できないものはないと考えています。</p>



# 政策論争成り立たず

## 重信町長・町議選を振り返って

2000/9/12 (X) 愛媛新聞 産3議席確保

### 進む都市化 住民参加課題

十日投票の温泉郡重信町長選挙は現職の和田治樹氏へだが、新人の渡部清春氏へが約二倍の得票差をつけて三選を果たした。選挙戦を通じて争点が明確でなく、政策論争は成り立たなかった。

これまで同町の選挙は「あまり波風の立たない」のが特徴と言われた。しかし今回は、現在の町政に疑問を投げかけるヒラが数度にわたり各戸に配られ、これに反撃するヒラも出回るなど、異色の様相となった。市面、住民からは興ざめの声があふれ、自治ムードも壊れた。

岡氏は保守系無所属で出馬。福祉や環境対策などを

公約に、際立った違いは見られなかった。このなかで町内の主婦グループが市町村合併や情報公開などについて岡氏のスタンスを問う公開質問状を提出。回答全文を載せた文書を住民に配った試みは目を引いた。

和岡氏が町長に就任して八年間、大きな失敗は見あたらぬ。総合公園建設は軌道に乗り、今春には新庁舎も完成。上下水道の都市基盤整備も本格化しつつある。並行して大型商業施設などの民間資本が相次いで流入。有権者数は一九九二年の選挙と比べ約二千五百人増え、松山市のベッドタウンとして一層、都市化が進んでいる。

半面、町の規模が大きくなるに従い、町政を縁遠く感じる住民も増えている。選挙戦では浮動票の取り込みが大きな焦点に。裏返せば今後の町政推進にも、これらリベラル層や政治的無関心層の取り込みが欠かせない。和岡氏が「ことあるごとに言う「住民参加」を今後、どのように実の形にしてゆかが問われる。

一方、同日選となった町議選は今回から定数二減となり、激戦。各候補は地元票固めと地区外への浸透を図った。候補者のなかには街宣車の使用をやめ、ハンドマイクを片手に地区内外を徘徊して選挙運動をしたケースもあり、同町の選挙スタイルに一石を投じた。

新人五人はすべて当選。

共産は一議席増やし、三人となった。同党県委員会などによると、県内の町村議会と同党が三議席を確保するのは、南宇和郡城辺町議会で七七年までの三期連続に続いて、二十三年ぶりとなる。

(地方部・上申 圭一)

## 愛媛新聞 2000.9.6

### 2候補者に公開質問状

温泉郡重信町の主婦らでつくる「くらしの学習会」(林智子代表、約四十人)は五日、重信町長選挙の候補者二人に今後の町政の課題について考えを聞く公開質問状を提出。七日までの回答を求めている。

質問状は▽市町村合併▽介護保険▽水問題▽ごみ問題▽情報公開に関する五項目。自由に記述した回答を、ファクスまたは電子メールで送るよう要望。結果はチラシなどで住民に公表する予定。林代表は「今回の選挙では大きな争点になるはずの市町村合併など、各候補者の考えが有権者に伝わっていない。項目ごとに候補者のスタンスを明らかにし、投票の判断材料にしたい」と話している。

## 日本人と英語

「21世紀日本の構想」懇談会が提唱している「英語の第二公用語化」をめぐって何か言いたい自分を常に感じていた。確かに、今日、世界の言語の中で、英語は国際ビジネスと政治の面で世界の共通語としての地位を得るようになってきているという点は否定するつもりもない。しかし、日本人の英語能力を高めるために軽い気持ちで英語を第二公用語にすべきと考える事自体言語にたいする日本人の感覚を物語っているように思えてならない。公用語の定義は？それも含めて問題提起したのだと懇談会の座長である河合隼雄氏は言っているが、それではあまりにも無責任ではないのか。公用語とは、そもそも国民に習得を義務づけるものではなく、出来るだけ広い範囲の国民に公平に行政サービスを提供するために政府が使用する言語という意味だから、もし日本にそれが必要だとすれば、英語以外にも公用語にすべき言語はあるはずだし、日本人の英語能力を高める為という目的とも到底結びつかない。それでも、勿論英語は話せた方がいい。では、どうすればいいか。政府は、英語の早期教育をもくろんでいる。

これにも、私は異論を挟みたい。英語に浸りきれるような環境を用意できればまた問題は別だが、（もし出来るとしたら、それはそれでまた他の問題を生じる可能性はあるが）早期英語教育をしたからといって、本当に必要な英語力が身につくとは思えない。言語の習得においては、臨界期仮説というのがあって、これは、子供の言語発達にはどの時期よりも容易に言語を獲得できる期間があるという理論で、これによると臨界期は思春期（およそ12～13歳ごろ）までつづき、言語習得はこの時期を過ぎるとより困難になるということである。したがって、第二言語や外国語を習得するのに適した時期とされているということで、英語の早期教育の根拠ともなっているのかもしれない。しかし、この臨界期は母語に関する習得にとっても重要な時期に当たるわけでこの時期にしっかりした日本語教育をして、日本語で論理的に考え、思考したことを筋道たてて話す訓練を十分しておかないと、その能力は身につかないということにもなる。英語を早期に教育するという事は、日本語教育がおろそかになるということをは必然的に意味するのではないか。その結果が、母語でさえ満足に自分の意見を述べられない人間を育成することになるのではないか。また日本語のみならず、日本人が人間として当然身につけるべき基礎知識、考えるための土台ともなる知識の獲得にも影響を及ぼすのではないか。

言葉はあくまで手段にすぎない。問われるのは、それによって表現される中身である。話す中身のない人がどんなに流暢にきれいな英語を話してもそれがどんな意味があるというのだろうか。

日頃日本語を外国人に教えていて感じることは、話したいことがたくさんある人は、日本語がなんとかじょうずになりたいという意欲がすごく、上達も速い。反対に話したいことの少ない人は、語彙の獲得が遅く、上達も遅い。また大人でも決して語学の習得に遅すぎるといえることはないと思う。現に1年で何不自由なく話せるところまで行き着く人は結構いる。(但し、日本語の場合、読み書きまで含めるとなかなかそうはいかないが) いかにかその言語を話したいという気持ちが強いにかにかかっていると言っても過言ではない。

英語の早すぎる教育には異論を挟みたいが、中学以上の英語教育の充実には大いに賛成である。今のままでいいとは思わない。特に英語助手制度の徹底的利用をのぞみたい。英語助手と言わず英語の時間の何コマかを、完全に彼等に任せたらいかだろうか。文法、読解は日本人の先生が担い、ヒヤリングとスピーチは完全に native speaker に任せたらどうだろうか。私の場合、英語助手からの不満をよく聞く機会があるので、お客様扱いでやりがいがないという彼らの主張ももっともだと思うからでもある。また専門分野での英語においては、やはり専門の英語教育が必要であるし、目的を持った語学教育はやり易いとも思うのである。すべての国民が英語をじょうずに話せる必要などないと思う。必要に応じて、目的に応じて養成する機関と、教育法がしっかりしていれば、後は本人の意欲次第というのが、外国語教育の本質だと思う。外国語以前に、話したい内容、話せる内容をいかにかたくさん持った人間たりうるかにまずは神経を注ぐべきであろう。(T.H)

### 届け、この願い



子どもの学力低下が取り上げられるようになって久しい。2002年度の新学習指導要領では、教育内容をさらに約3割減らすそうだ。現在でも大学の授業が成り立たなくなったと言われている中、これ以上教育内容を削減して、日本は一体どこへ行こうとしているのか。

近頃は、普段でも宿題は、とても少なくなっている。夏休みなどの長期の休みにも宿題は出さない、というのが主流だ。

ここ重信町内の小学校でも、夏休み中の宿題はほとんどなかった。子どもがのびのびできていいではないか、と思われる方もいらっしゃるだろうが、子をもつ親としてはそんな気持ちにはなれない。学習は、反復することによって身に付く。特に小学校レベルの基礎段階においては。

私は、本屋へ走り、問題集を購入したが、塾へ走った家庭も多かろう。夏休み前、新聞の塾のチラシの多いこと。塾も親の不安を知っている。かき入れ時なのだ。“短期集中講座”“夏季講座”などという名で、数万円から5万円程度の費用がかかるのにも驚いた。親というものは、我が子のためと思えば、1ヶ月5万円もお金を支払うのだ。このワラにもすがりたいような気持ちは私も同じ、よくわかる。

しかし、だ。そもそも学力はそんなに一朝一夕に身に付くものではないのではないか。毎日のコツコツとした積み上げしかないと思うのだが。それに、我家の家計では、成果があるかどうかわからないものに数万円もかけるわけにはいかない。これは、本当につらい。

教育が家庭の経済力に左右されるのでは、教育の機会均等という面で問題なのではないか。大学などの高等教育ならまだしも、義務教育のレベルにおいて。公教育は、その使命を果たしているとは言えないと思う。

子どもは、一日の活動時間のうち、ほとんどを学校で過ごす。その学校での学習指導をもっと充実させてもらいたい。何も詰め込み式の受験勉強を望んでいるのではない。私たち普通の親が求めているのは、社会人として生きていく上で必要な基礎基本の学習の習得なのだ。文章の読解、漢字の読み書き、少数・分数の計算、社会科なら、常識的な地理や地名など。今や、それさえ危うい状態だと思う。

「自主性重視」「ゆとり」などの美名のもとに系統的な学習をおろそかにしてきてはいないか。反復が必要な学習に対し、手を抜いてはいないか。学習が遅れがちな子どもに対し、居残してでも理解を手助けしてやろうという熱意をもっているか。真摯に反省していただきたい。

しかし、ここで学校関係者を責めてみても問題が解決するわけではない。学校は、国の方針に従っているだけなのだから。文部省は、「創造性」や「生きる力」ということをひきあいに、教育内容や授業時数を削減する。しかし、基礎学力の無い者に創造性が身に付く訳がないではないか。そもそも「創造性」などというものは、膨大かつ系統的な基礎知識に支えられてこそ発現するものではなかろうか。そして、「生きる力」とは一体何なのか。子どもにとっては、基礎基本の習熟こそが「生きる力」になると、私は思うのだが。

昨年、重信町に在住の外国人の方に、日本の教育について語っていただいた学校があった。中国の方と南アジアの方がおられたが、異口同音にいわれたことは、「日本にいては子どもの学力がつかない。本国の子どもの方がよく勉強する。帰国した後が心配だ」ということだった。こんな状態が続いて、日本は今後世界の中でどういう位置を占めていくことになるのだろう。そして、国民のレベルが下がっていくような方針をとるのは、なぜなのだろう。国民の知的レベルが下がった方が政治がやりやすいからだろうか。これでは、「いつか来た道」ではないか。まさか、そんなことはないだろうとは思いますが。話のスケールがとて大きくなってしまった。話を元に戻すと、とにかく親の願いと教育の方針がどんどんかい離してきているということだ。

では、現行の中で、私たちができることはないだろうか。そのヒントとして、東京の立川、第九小学校の取り組みをあげてみる。詳しくは後の新聞切り抜きを読んでいただくと分かるが、地域や家庭からボランティアとして学校へ出向いて、授業の援助をするというものだ。

学校長の裁量にかかっている面が大きいので、この実現はむずかしい面もあると思うが、子どもの学力伸長のために、学校はもっと努力してもらいたい。少なくとも授業はできるだけカットしないでほしい。

ほとんどの親は、好んで塾へ行かせているのではないし、まだ学校を信じて、学校と家庭学習中心に学ばせている親もたくさんいるのだから。

# 学校

第3部  
進学塾  
から見ると

3

オレンジ色の火が校舎屋上から降りてくる。ケープルを伝って校庭の聖火台に吸い込まれる。子どもたちの目の前で、鮮やかな炎が立ち上がった。

横浜市のある市立小学校。春の大運動会は華やかな演出と歓声で始まった。

計画したのは子どもたち。ダンスの振り付けも自分らで考えた。

この学校では、夏の宿泊学習や秋の文化祭など、行事すべて

を子どもたちが取り仕切っている。

子どもの自主性を重視した、こうした取り組みを始めたのは四年前からだ。二〇〇二年度からの新学習指導要領に盛り込ま

## 「自主性重視」勉強は……

■ 中学二年生のリョウタ君はこの小学校の卒業生だ。難関入試を突破して中高一貫の有名私立中学に合格した。

■ 小学校は楽しかった。友達と一緒にダイオキシン問題につい

「勉強は進学塾でした」と思っている。週四日通い、世界各国の首都をすべて覚え、図形に補助線を引いたり裏返してくっつけたりと、算数の難問にも挑戦した。

■ 正解を競い合う塾の友達は、

の準備が学習になる、と言ったのをリョウタ君は覚えている。「なるほど」と思ったからだ。でも、クラスには分数の計算ができない友達もいた。今になって思う。「自分は塾で勉強しただけで、そういう友達は中学で苦労しているんじゃないか」

■ 学校の方針に理解を示すリョウタ君の母親も、親の間には

れる「総合的な学習の時間」を先行する形で試みてきた。

校長は「一人に『させられる学習』から、自分から『する学習』に変わった。一人ひとりの成長が実感できる」と胸を張る。

て調べて文化祭で発表したり、学校の花壇で生ゴミから肥料をつくる方法を試したりもした。

■ その代わり、普通の勉強はあまりしなかった。行事のたびに、準備のため授業がつぶれたせいだ。

■ 気の置けない学校の友達とは違う「尊敬できるライバル」だった。

■ 「劇のせりふを一生懸命考えれば、それが国語の勉強になる」。六年の時の担任が、行事

「このままでは、学力が身につかない」という不安が渦巻いていたと話す。「勉強は塾で、というのが暗黙の了解でした」

■ 保護者側から学校に、もっと勉強させてほしい、と要望が出されたこともある。



校長は「机上の勉強より大切なことがある。もちろん、基礎学力を保証するのは学校の役目。新しい学習指導要領の先取りで授業時間も融通しやすくなったので、きちんと学習していい」と話す。  
(カタカナは仮名)

# 学力二極化避けられず

かつて米国で白人が郊外の学校に逃げる「ホワイト・フライト」といわれる現象が起きた。日本の大都市部では成績のいい中流層の子が公立学校から私立に逃げ出す「ブライト・フライト」が起きている。

私立中学に通わせる社会階層は以前からあった。それが一九八〇年代に増えた。バブル崩壊で、い

ったんは沈静化した。今年になって再び増えた。これは教育内容を三割減らすという新学習指導要領への親の抵抗ではないか。

学校は学び場としての機能を縮小している。特に基礎学力の面で親の信頼を失いつつある。不安に感じる親は、自衛として、塾に学力維持を期待する。すべての親が幼いころからがむしやらな受験競争をさせようとしているわけではない。

塾に通う子には学校の授業は退屈になり、授業レベルを下ければ、さらに悪循環を生む。総合的な学習の時間など、体験を通じ、「考える力」を付けさせるのが学校の役割だともいわれるが、それでは基礎がおろそかになる恐れがある。塾で知識を得ている子にとっては、体験的な学習をやっている学校はいい場所だ。だが、それ以外の子にとっては、基礎がおろそかだと、何が身につくのか。楽しいだけに終わる危険性もある。



荻谷 剛彦氏

東大大学院教授(教育社会学)

争をさせようとしているわけではない。

「考える力」を付けさせるのが学校の役割だともいわれるが、それでは基礎がおろそかになる恐れがある。塾で知識を得ている子にとっては、体験的な学習をやっている学校はいい場所だ。だが、それ以外の子にとっては、基礎がおろそかだと、何が身につくのか。楽しいだけに終わる危険性もある。

かつては地域社会が担った生活体験を求められ、最近では基礎学力も落とすと言われる。学校は期待される役割が多すぎる。

東京都内の小学五年生の二三%、中学二年生の四三%が、自宅でまったく勉強しないという調査がある。この層が九二年から九八年にかけて急増した。九二年は現在の学習指導要領が導入され、「指導から支援」へといわれ始めた年だ。このころから宿題もドリルも減った。

小学校の授業ではどの子も楽しそうに見えても、系統学習が中心になる中学や高校では、それまで隔れていた差が表れる。基礎学力の有無による二極化は避けられない。

そもそも「ゆとり重視」は大都市部の子が夜の塾通いなどに追われているといった偏ったイメージをもとにした政策だ。全国一律に教育内容を削減した場合、塾や私立中学のない地方の子はどうするのか。地域や階層間の格差が拡大する心配がある。

受け皿のない地方では、勉強の不得意な子には学習支援をし、「できる子」にも先に進める対応をするなど、公立学校が考えないといけない。そのために行政も教材や教員を十分手当てし、財政的な支援を拡大すべきだ。

# 親や地域、授業参加し応援

朝日新聞

2000、8、28

東京・立川、第九小の挑戦

「かいたよ」  
1年生が引き算の練習問題から頭をあげた。

「よくできたね。はい、花マル」赤鉛筆で丸をつけたのは、同級生のお母さんだ。子どもはちょっと誇らしげに笑った。

東京都立川市の市立第九小学校では、3年前から保護者や地域の人に、教員の支援者としてボランティアで授業に参加してもらっている。

1クラスを複数の教員で指導するチームティーチングから発想された。今年は1年から4年まで計8クラスの算数や国語の授業を中心に、ボランティア60人近くが加わっている。

◇ 6月、計10時間かけた1年生の引き算の授業には「お母さん先生」や「おじいさん先生」らが毎回5人から9人加わった。最初の授業は担任の岡崎恵子先生の考え方の説明から始まった。

1組で向かい合う形に並べかえ、グループ学習に移った。1組に1人の「お母さん先生」「おじいさん先生」らがつき、練習問題に取り組む。解けない子には、教材のタイルを使ったり一緒に指を折ったりして再度説明する。前回の授業までさかのぼって説明するのも自在だ。



「おじいさん先生」らが加わり、大勢で子どもの勉強を手助けする。6月19日、東京都立川市の市立第九小

「金魚が4匹います。こっちの水槽に2匹移すと、残りは何匹かな」教室で飼っている金魚を実際に水槽から水槽に移動させてみせた。次に教材をキュウリにかえ「教頭先生に3本あげると、残りは何本?」。教室の隅で、「お母さん先生」や

「おじいさん先生」らが、子どもたちの様子を見守る。落ち着かず、横を向いたりうつむいたりする子もいる。「お母さん先生」が顔を近づけ、小声で「先生の話をよく聞いて」と促した。全員で例題を解いた後、机を6人

岡崎先生は「授業中に全員に声をかけて理解したか確認したいが、1人では手が回らず、やるとすれば、居残り学習させることになる。支援者が入れば、授業の中で解決できる」という。支援者の1人は「子どもは、大人が自分について、じっくり説明してくれることでやる気が増すみたいです」と話す。



## この夏を振り返って A, M

20世紀最後の重信町長・町議同時選挙が終り、秋風がこちよくなってきたこの頃ですが、町長・町議同時選挙では、町長候補のお二人に対する質問状を送り、回答書を町内世帯数約8300に対して約3200枚を印刷し、会員・購読会員・応援を申し出てくれた人とで各戸へ配布したことは「くらしの学習会」らしく、自画自賛ではありますが充実感を味わえた活動でした。

さて、今年の夏を振り返ってみると、大変暑い日が続き、水の豊富な重信町でも節水と呼び掛けるほどの小雨で、どうなることかと心配していましたが運よくと言うか、台風のお陰でなんとか危機を脱することができました。でも、本当に重信町の水は不足する状態なのだろうか。地域的にみると不足気味のところもあると耳にするけれど、全体の水をうまく回せば、素人目には今のところ十分あるように思えてならないのです。ただ、市町村合併問題がある為に「山鳥坂ダム建設」に依存する方向で進んでいるのであるのなら今後の市町村合併は、大変重要な問題になりそうです。台風待ちの綱渡り的な日々を過ごさなければならないのも不安です。節水の知恵を十分に生かして今ある水を大切に使う方法を考えていけない時期がきているようですね。

今年は、家族とは別に夏休みをもらって、友人8人で中島町二神島へ一泊で知人経営の民宿へ出かけてきました。町中で育った私にとって島での一時は、とても懐かしい雰囲気にも包まれ、ゆっくりと時間が過ぎるのを満喫し、もちろん新鮮なお魚をたっぷり頂いて大満足な2日を過ごしてきました。

今は、シドニーオリンピックが始まりテレビに釘付けの毎日ですが、9月29日に大久野島（広島県竹原市忠沖町沖）へ出かけることになっています。『黒竜江省遺棄毒ガス弾回収』の記事を目にされた方もいると思いますが、その毒ガスの多くを製造していた島（軍事期「地図から消された島」）がこの大久野島です。昨年からはじめた『四国平和行進』に微力ながら平和の学習をしながら参加しています。「沖縄サミット」を機に沖縄戦の学習をしたり、「松山城北戦跡めぐり」に出かけたり、平和学習初心者としては様々な企画に参加して、平和の大切さを子供達に少しでも伝えたいと戦争体験のない親としては、今、私なりに頑張っているところです。大久野島見学の感想など、次号にてお知らせできる様、良く見、感じてきます。

## 雑感

何年前か、初めて“ゴールドプラン”という言葉を目にした。高齢者の介護を家族だけの負担に任せず社会全体で支える為、様々な公的サービスを提供し、高齢者の“生活の質”を向上させよう、という内容だったように思う。“十ヶ年計画”という副題がついていたが、その計画が実行されたのかどうか、いつのまにか“介護保険”という言葉ばかりを聞くようになった。一定の保険料を支払うことによって、年齢に達し認定されれば、その介護度に応じて一割負担のもとに最高、月額35万円分のサービスが受けられるという。そんな話を聞き、そのサービス分をローンの返済にあてれば、高齢者が残った機能でより快適に生活できる様なバリアフリー住宅への改築ができるかもしれない、とか離れて暮らす老いた親の介護に出かける時留守家族の為の家事を頼むことができるのかもしれない、と思ったが今年4月から実施されてみてそれは不可能だと知った。利用者の様々なニーズに応えるとよく言われているが私の考えたことは“様々”の中には入らない突飛なものなのだろう。そして今エンゼルプランなるものが騒がれている。仕事を持つ“女性”が出産後も安心して仕事に専念できる様24時間保育を視野に入れた施設保育の充実を計るものの様だ。介護保険もエンゼルプランも誰かの支えを必要として生活する“家族”をその道のプロである“他人様”の手に委ねることを前提とした発想のように思える。しかし、特に子供は大勢の中のひとり、としてではなく、いつでも自分のことだけを見つめてくれるという“安心”の中で人生をスタートして欲しい。“女性”が安心して仕事を続ける為という考え方こそ、“子育ては女性だけの仕事”という観念がある様に思う。子育てをする“保護者”は父親であっても母親であってもかまわない筈だ。子供に必要な間、父親であれ、母親であれ、十分な期間、職場を離れることができる様な社会的な支援こそ望みたい。目まぐるしく変化進歩する現代社会において、何年もの間職場を離れることはそれは大変なことに違いない。しかし親は一方的に子供を育てているわけではない。子供によって育てられる部分がどんなに大きいことか。子育てによって一喜一憂し、どんな場合でも愛し、守り、計算と段取りだけではどうにもならないことを実感して職場に復帰した人間は職場にとっても大きな財産になると信じたい。様々な立場の人達がそれぞれの

立場を尊重し共生することによって、バランスのとれた職場や社会が成立すると思う。最近耳にする様々なプランは、収入を伴う職を持つ人間を1人でもふやし、税収を増やそうとしている様に思えてしまう。その内、昨今それでなくても何かと肩身の狭い私の様な専業主婦の為のオバチャンプランを作ってくださいなのかもしれない。こんなことをイライラと考えるのは、殊の外厳しい今年の残暑のせいなのだろうか。

(K.O)



### モネの庭を訪ねて

8月の初め 高知県の北川村にある“モネの庭”へ行ってきた。そこは少し前にテレビで紹介されていて、その映像は、私の“行ってみたい欲望”をかきたてた。重信町から車で約3時間半。北川村へ入る途中の川は、水が満々と流れていて、その景観は見る者を飽きさせない。折しも松山では水不足が盛んに言われていた時だったので、その水量は羨ましい限りだった。

私の想像より山奥に創られていた“モネの庭”は、それだけにひっそりとした雰囲気を持っていた。「フランスから春の風」というキャッチフレーズが書いてあるパンフレットの一文を紹介しよう。

この庭は、印象派の画家 クロード・モネがこよなく愛したフランスのジヴェルニーの庭から「池の庭」と「花の庭」をモデルに創られています。

庭を散策すると、モネが描いていた風景に出会うことができます。水面に映る木々や草花の美しい様子は、土佐のまぶしい光と青い梅を背景に四季折々の自然模様を描きだしてくれます。木々の成長とともにとの姿をかえる庭は、訪れるたびに新しい風景を見せてくれます。日本風のしっとり落ち着いた「池の庭」とフランス風の繊細で美しい「花の庭」は、絶妙なハーモニーを奏でています。

(一部略)

園内にはモネの名画（レプリカ）を展示し、モネの画集やガーデニングに関する書物が見られるギャラリーやワイナリー、レストランもある。

私はまず、青い睡蓮を見るために池の庭へ足を向けた。平日にもかかわらず、女性グループ、若いカップル、家族連れ、夫婦連れと、たくさんの人達とすれ違った。又、他県からの来園者も多いらしく、駐車場には高知ナンバーと他県ナンバーが半々だ。

モネの庭は今年4月に開演した。

高知市からでも車で1時間半かかる地理的な不利や冬場等の季節的な不利を考えると、これからの独自の工夫が必要だろう。

今のままでは、来園者は減少するかもしれない。

何より、一度訪れた人にもう一度足を向けさせる為知恵をしばらなければ、せつかくの施設が寂れてしまいかねない。

北川村は、モネの庭の近くに中岡慎太郎の生家があり、そのそばに彼の記念館をつくっている。

さらに、上流には、北川温泉がある。

地域振興の柱として創られたであろうこれらの施設は、そこに一日中、ゆったりとした時を求める人には良い所だと思う。

(Y-O)  
R.D



## 今後の予定

### おさんぽ会

日時:10月7日(土) 2:00から

場所:かすみの森か緑化センターあたりの重信川の土手を  
歩きましょう

集合場所:町民会館

出会い塾も計画しています。皆様のご要望をおよせください。



くらしの学習会では、随時会員を募集しています。

活動会員 2000円/年

購読会員 1000円/年

振込口座番号(郵便局)

くらしの学習会 01610-5-21026

問い合わせ先

TEL・FAX 089-964-6956 (株)